

『川奈まり子 牝猫義母』(2002)

(2011年、『けもの道 義母と間男』に改題し、再上映)

2002年1月18日公開

製作…旦々舎

配給…Xces Film

スタッフ

監督…浜野佐知

企画…稲山悌二

脚本…山崎邦紀

撮影…小山田勝治

音楽…中空龍

録音…シネキャビン

編集…フィルム・クラフト

助監督…松岡誠

制作…鈴木静夫

スチール…岡崎一隆

配役

眉山澄江…川奈まり子

眉山文子…佐々木基子

古河由子…風間今日子

眉山左門…久須美欽一

眉山民生…なかみつせいじ

古河卓一…柳東史

青木黄次…平川直大

あらすじ

フリーライターの澄江（川奈まり子）に、ある日旧家の眉山家当主・左門（久須美欽一）の伝記を書く仕事が無い込んでくる。住み込みで左門に聞き取り調査をするうち、澄江は左門に求婚される。左門は妻に先立たれ、息子夫婦に囲まれながらも孤独を感じていた。残りの人生を意味あるものにしてくれと左門にせがまれ、澄江は了承する。とはいえ、若い澄江と老人の左門の結婚は、眉山家の家族には財産目当てにしか見えない。彼らは澄江に冷たく当たる。左門もまた、澄江と息子たちの関係を疑い、澄江に暴力を振るうようになる。そんなある日、澄江が左門からの暴力を振り切った反動で、頭を打った左門が植物状態になってしまう。家長である左門の抑圧から解放された息子たちは、澄江と関係を持とうとする。息子たちの嫁は、澄江に白々しい視線を送りながらも、次第に夫の行動に辟易していく。閉塞的な環境と立場に、澄江はとうとう堪忍袋の緒が切れて……。

解説

澄江は一枚の写真を手にしている。そこに映されているのは、眉山家の家族だ。家長である左門を二人の息子が挟み、後列でその妻たちが微笑む。次のショットでは、食卓を囲む眉山家の人々に、マシンガンを撃ち放つ澄江の様子が映される。このショットは、物語における澄江の立場を象徴的に表している。澄江は眉山家というイエに外部から侵入し、家長の名のもとに胡坐をかく男性という価値観に反抗するのである。その結果、自我を取り戻した妻たちによって眉山家は離散。彼女らが記念にとった最後の家族写真では、女たちが笑顔を見せる後ろで、気まずそうに映る男たちに、かつての権力は見る影もない。

このような家長長制に対抗する女性主人公の物語は、浜野のフィルモグラフィーに共通して見いだすことのできる主題である。浜野は、「女の性を女に取り戻す」ことをテーマに、男社会であるピンク映画界の第一線を走って来た。「ふざけるんじゃねえ」と叫び、男性たちにNOを突きつける妻たちは、まさに自らを取り戻しており、一般映画『第七官界彷徨―尾崎翠を探して』(1998年)、『百合祭』(2001年)を経由したのちの浜野のピンク映画を代表する作品であるといえる。

なお、主人公・澄江を演じる川奈まり子は、1999年に前夫との離婚を機にデビュー、ブレイクしたAV女優。川奈は、2004年にAV業界を引退し、作家として活動していたが、2016年にAV業界の健全化を図る当事者団体・一般社団法人表現者ネットワーク(AVAN)を設立した。AVANは現在目立った活動をしていないが、若い俳優（特に女性）のAV出演強要という業界の構造的な問題に異議申し立てをする姿勢は、浜野の活動精神と共鳴するところがあるだろう。

参考資料

- ・「川奈まり子 牝猫義母」、PG-WEB-SITE、<https://pg-pinkfilm.com/data/2002/020102/mesuneko.htm>（2026年10月7日最終閲覧）。
- ・「業界健全化へ団体設立 元女優の川奈さん」、毎日新聞デジタル、2016年7月8日、<https://mainichi.jp/articles/20160708/k00/00e/040/260000c>（2026年10月7日最終閲覧）。

（執筆：加藤りょう）